

2024年11月3日 主日礼拝(第二)

説教題「食べなさい」エゼキエル書2章1節～3章3節

主任牧師 加藤 誠

『人の子よ、わたしが与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。』わたしがそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった。(エゼキエル書3章3節)

教会の元気の源、エネルギーの源はなんでしょうか？パッとすぐに思うのは「主日礼拝」です。共に神の前に集められ、共に賛美する。今日もあの人の顔が見える。あの人と言葉を交わすことができた。そのような「共なる礼拝、交わり」に私たちは元気をもらいます。そういう意味では、主日礼拝に招かれた者同士でもっとお互いに挨拶できるといいですね。外国の礼拝なら初対面でも握手をし、自己紹介し合うことがごく自然に行われますが、日本人はどうも苦手なようです。いつまで経ってもほとんど挨拶を交わすことができない。でもご近所同士ならお互い挨拶しますよね。ご近所同士よりも、私たちの関係は遠いのでしょうか。お互いに主日礼拝で顔を見慣れている人とはもっと気軽に「おはようございます！」と挨拶できたらいいし、自己紹介し合えたらと思います。礼拝のことを「セレブレーション」（お祝い）と呼ぶ教会もありますが、共に礼拝の招きにあずかった者同士で喜びを分かち合うことを自然にできるようにになりたいものです。

また教会の元気の源と言え、私にとっては水曜日の祈祷会があります。特に朝の祈祷会はメッセージの後で分かち合いがありますが、それぞれが聖書からどんな励ましや慰めを受けているかを聞けることで大きな励ましをもらいます。教会に集い、共に祈り、共に聖書を食べる。それは教会にとって大きな力です。

ただそのように「共に集う」ことは私たちにとって確かに大きな力なのですが、下手をすると「共に集う人」ばかりを見てしまって、忘れてしまいがちなものがあることに注意が必要です。ある牧師の言葉にハッとさせられました。「教会の集まりで三人しか集まらなかった時、今日はこれだけしか集まらなかったのかとがっかりした。あの人はどうして休んだのか。せっかく集まるならせめて五、六人はいてほしいなど。でもその時、わたしは『二人または三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいる』（口語訳マタイ 18：20）をすっかり忘れていた。この御言葉よりも人数が気になっていたのだ…。」

「共に集う、礼拝する、賛美し語り合う」ことで教会は力を得る。けれどもそこで一番肝心なこと、無くてならないもの。それは、その集まりの真ん中におられる「イエス・キリストを食べる」「イエス・キリストを見だし、その語りかけを聴く」ことです。その一番肝心なことがもし起こっていない「共なる集まり」であるなら、それは「ただの人間の集まり」にすぎない。「みんなで集まって、なんだかうれしいね」

で終わってしまうのであって、そこに「教会」は建てられていかないのです。

ヨハネ4章に不思議なやり取りが描かれています。弟子たちが主イエスに「ラビ、食べものをどうぞ」と勧めると、イエスは「わたしにはあなたがたの知らない食べものがある」と応えます。ポカンとする弟子たちに主イエスは続けます。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることであり」と。主イエスの元気の源は「父なる神との対話、つながり」にありました。私たちが「共に礼拝に集う」時に、一人ひとりがその交わりの真中に「主イエスとのつながり、対話」をしっかり受けて、「主イエスを食べる」ことが起こっていく。その肝心なことが起こっていないなら、どんなに大人数の主日礼拝であっても、それは「人間の集まり」にすぎない。そこに「教会」は建てられないことを覚えないのです。

今朝ご一緒に開いたのは、エゼキエルという若者が預言者としての召命を受け、神の霊を吹き入れられて、自分の足で立つ者とされていく場面です。エゼキエルたちは捕囚によってエルサレムから遠く離れたバビロンに連れてこられて毎日、川のほとりで故郷を想っては嘆き、涙を流していました。彼は祭司の息子であり、ふつうなら30歳で祭司職を継いでエルサレム神殿で働くはずでしたが、バビロン軍の侵略を受けて神殿を失い、異郷の地に連れてこられてしまった。神殿がなければ神に礼拝をささげることもしない。祭司という仕事そのものがなくなってしまった。これから自分はいったい何をして生きていけばいいのか。その将来にまったく希望を見いだせない暗闇に閉ざされたような時に、エゼキエルは幻で「神の栄光」が捕囚の地を自由自在に動き回り、自分たちに語りかける主の言葉を聴くのです。そして、エルサレム神殿を失っても神を失ったわけではない。この捕囚の地に主なる神は生きて働き、自分たちと一緒に歩んでくださっていることを知らされます。

「人の子よ、口を開いて、わたしが与えるものを食べなさい。」…それは哀歌と、呻きと、嘆きの言葉であった。「人の子よ、この巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。」…食べると蜜のように甘かった。（エゼキエル書2・1以降）。

私たちが生きている現実には「哀歌と呻きと嘆き」に満ちています。けれども、その現実には神が祈りを注いでいる場所。枯れた骨（37章）を生き返らせる神が霊が注がれている場所。インマヌエルの主であるイエス・キリストが、私たちの苦難をご自分の苦難として共に歩んでくださっている場所。私たちに吹き込まれる「神の祈り、イエス・キリストの霊である聖霊」を腹に収めていく時、私たちは「蜜」の味を知ります。「蜜」は人を元気にして立ちあがらせる力です。その意味で教会は「イエス・キリストを食べて、イエス・キリストを腹に収めていく」とき、私たちはこの世界を覆うさまざまな困難の中に「蜜」を味わう者とされていくのです。

さて私たち大井教会は、何を食べて元気をもらい、立ち上がるのでしょうか。